

里海カンファレンス in 南三陸

SESSION1 いのちめぐる里海里山・震災復興の10年を振り返る

～学びの宝庫となった里海・里山～

対話の記録：

(なお、内容については、一部、意識が入っており、その文責はすべて太齋にあることをお断りする。)

ファシリテーター (太齋)

セッション1は対話形式で、南三陸の誇るプレイヤーの皆様との対話の中でぜひ取り組みを紹介させていただこうと思っております。まず漁業の話から入りたいと思うんですが、スライドお願いします。

これ、震災前の志津川湾の様子ですけど、ちょっとお2人に思い出していただいて、こちらブイの数がすごいと思うんですけども、震災前ってどういう状況だったのでしょうか？

後藤清広さん (戸倉地区カキ部会長、(以下、清広さん))

そうですね、今震災前の写真が写ってるんですけども、この頃は船も歩く(操船する)のも大変ですし、本当にね、渡って歩けるんじゃないかってぐらいブイがあったんです。やっぱり生産量を伸ばしましょう売り上げも伸ばしましょうと、どんどんそういう意味で養殖していったんですけども、ある時成長が悪くなるってくるんですよね。そして2年で生産したのが、ちょっと2年ではカキが大きくなって3年かかるようになってしまうんですよね。さらに3年分のいかだを入れましょうと。少なくすればよかったんですけども、やっぱりなかなか少なくすることができなくてですね、どんどんどんどんイカダも増える、成長も遅くなる、さらにイカダも増えると、この悪循環に陥ってましたよね。

ファシリテーター (太齋)

ありがとうございます。本当に歩いて渡れそうなくらいの量だったんですよね。そうこうしてるうちに震災が来るわけですね。次のスライドお願いします。

こちらの今日もおいでになっている。阿部富士夫 (JF みやぎ志津川支所長) さんからいただいた震災直後の写真ですけども、津波が来まして全ての養殖施設が流されてしまうと。もう本当に大きな被害を受けたんですが、清広さんも民子さんもご自宅も被害に遭われたんですよね。民子さんこのとき、どういった状況だったんですか。

阿部民子さん (たみこの海パック代表 (以下、民子さん))

はい。震災当時、主人はちょうど海に出て仕事をしていたところでの震災になったので、船で沖に出て、次の日に見た海は、陸と海がもう隔てがないというか、どこが海で、どこが陸なのかわからないくらい。船がひっくり返ったり、陸に船が上が

ったり、もうなんかこう、地獄を見たような感じで、これから本当に仕事できるんだろうかっていう、不安と恐怖に陥りました。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。

あまり思い出したくもないことかと思えますけどね。その中で、ここからゼロからというかマイナスからですよ、もう漁師さんたちも漁業再開に向かわれるわけですよ、ここで、通常ですと原形復旧といって元に戻すというね、国の補助があるわけですよ。けどそれを、戸倉の人たちはあえてしなかったっていうところが、3分の1の革命ということになります。

次のスライドをお願いします。

これは今日も後ほどおいでになる小松先生のグループが、柳先生たちが計画されたプロジェクトで解析された結果なんですけど、左が震災前のカキいかだの数ですね、それが震災後はこの右側になっていくということで、戸倉の人たちは大きな決断されましたね、（イカダの数を）3分の1に減らすという。

これ3分の1に減らすというのは、正直、普通の感覚から言うと、とても怖いと思うんですけど、清広さんなぜこれを決断されたんですか。

清広さん

実は3分の1っていうようなことが先行して広まったんですけど、最初から3分の1ではなかったんです。一番の目的がですね、3年かかっていた生産期間を、1年にしましょうと。そして品質を上げて。品質が上がればあげれば単価も上がるし、コストもね。最初は何とか生産量が少なくなっても1年でできる海を漁場を作って、それを達成すれば何とか利益は残るんじゃないかっていうことで。それで最初に試験のいかだを13台を作ったんですけども、それで40m（間隔で）、これなら1年で、大丈夫でしょうと。（実際に）実験してみてOKだったんですけども、そうやっていくと使える海は決まってるんですよ。その間隔でイカダを入れたシミュレーションしてみますと、どうも300台、350台が目いっぱい。今まで1100台位以上やって平均でも1経営体20台超えていますから、どうもこのままいくと人数で割っていくと8いかないなあ、7.8台ぐらいかなと。結構もうざわつきましたね。

ファシリテーター（太齋）

そうですね。これまでのいかだ同士の間隔が10mとか15mしかなかったのを一気に40m広げるという大改革ですよ。これ民子さん、横で聞いてといいますか、当事者のお一人だったと思うんですけど、減らすって聞いたときどういうお気持ちでした。

民子さん

はい。話し合いに主人が出ていて、その話を家に帰ってから聞いたときに、私はあり得ない！と思いました。もう本当に一生借金持ちになるんじゃないかと。これが

らいろいろなことを家とか、作業場とか、海をやっていくには加工場も（再建しなければならない）。それが3分の1に減らすっていうのは、単純に収入も減ってしまうんじゃないかなと思って。

私はありえん、と思いました。

ファシリテーター（太齋）

普通の感覚でいくとおそらくそうだと思うんです。それを決断されて進められるわけじゃないですか。その信念といいますか、清広さんの中では譲らない部分があったと思うんですけど、それを、ただ多くの方が、例えば民子さんのような感覚でいたときにどうやって進められたんですかね。

清広さん

いや、そうですね、民子さんの旦那さんも私の同級生で、本当に一生懸命手伝ってもらってたんですけども、同級生何人かはもう、「これだけ減らしたら、食っていけないぞ。どうやって借金払うんだ？」っていうなことをね皆さん本当に心配していたです。でも何もなくなったこのときしか試せる期間がないので、やってみて駄目だったらまた考えますけども、1回はやってみましょうっていうことで。壮大な実験をできるチャンスはもう二度と来ないので、やってみたいと。あと皆さんもちろん反対はするんですけど、もしうまくいったならと。反対する人でもいいものを作りたいという気持ちは同じですし、1年で本当にいいものができて、もしそれが実現するのであればそれに越したことがないっていうのは絶対どっかにあるはずなんで。

それで実験してみる気に皆さんなったのかなって私は思います。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。

話し合いを何度も何度も重ねられたと思うんですけど、その中で民子さん、隣で参加されて、どういうふうに話し合いが変化してたかって覚えてらっしゃいます。

民子さん

それこそ本当に何回も何回も、主人がその話し合いに参加してくるたびに家に持ってきて、今日はこういう話したとかって聞くんですけど、主人は逆に減らすっていうことには、最初は抵抗あったみたいですけども、だんだんこう、やっていくうちに、やっぱり減らす方が、いいんじゃないかっていう方に思ったようです。

でも私は、ピンとこなかったというのが正直なところ。

ファシリテーター（太齋）

なるほど。そういった中で清広さんは、「とりあえずやって、駄目なら戻す」ということで、押し進められるわけですよ。これかなりすごいことで、人をすごく引っ張るようなリーダーシップではなくて、逆に柔らかなリーダーシップを発揮され

たなというふうに感じたんですけども、そこで、一旦は皆さんで決めたわけですよ、不安の中で。そこに清広さんの中では成功するっていう確信があったんですかね。

清広さん

そうですね。試験的にやってみたんですけども、成功する確信というよりはイメージだけはもう絶対上手くいくでしょう、というようなことだけは思っていました。確かに失敗も当然ありうるんですけども。今まで3年かかっていたのにそんなに簡単にいくわけないっていうのはもちろんですけども、ただやっぱりそうですね、イメージ的にはもう絶対成功するっていうイメージしかなかったですね、私には。

ファシリテーター（太齋）

そして、40m 間隔の養殖場が出来上がったわけですよね。これによって起こったことっていうのが、実はすごいことだったんですけど、次のスライドお願いします。

こちらですよね。平成22年（震災前）との29年（震災後）を比較したところですけど、戸倉地区の1経営体当たりのカキ養殖をやってる方の生産量と生産金額と経費と労働時間を示したものです。

なんと（イカダを）3分の1に減らしたにもかかわらず、生産量が2倍になったと。

これは何が起こったんです？

清広さん

そうですね。最初の目標として、何とか同じくらいを維持したいなっていうのがあったんですけども、もう1年で生産できるっていう目標が達成できましたらですね、やっぱり1年っていうのは、ものすごく効率がいいんですね。生産性がものすごく上がりましたし、1台あたりの生産品質も良くなって、想像を超えるぐらいの生産量になりました。

これには一番驚いたのは私自身でした。金額もちろん良くなったんですけども、ある程度、10年かけて目標達成しようという相言葉だったんですけども、もう半分で目標が達成できたので、それにもさらに驚きました。

ファシリテーター（太齋）

民子さんいかがでしたか？ご自分でもカキ生産されてますけども、漁場を広げたことによっていろいろ変わったことがあると思います。率直にどんなふう感じられたか、この金額も含めてですね、ちょっとお話いただけますか？

民子さん

最初、どうなんだろうっていう不安から、やってみたらこんなに違うのっていう感じ。一番は自分の時間ができた。なんていうんだろう、「働け働けの時代」は終わったなっていう感じがしました。

ファシリテーター（太齋）

まさにこの労働時間のところですよ。これまで夜中の2時ぐらいから皆さんカキむき作業やってて、午前中では終わらないみたいな話だったのが、それがね、だいたいもう、午前中で終わるような感じですよ。なので、自分の時間ができたってまさにそこだと思うんですけど、これ、正直なんでできなかったの、みたいに今だったら言えますけどね。

3分の1減らしたことで、金額も増え時間も増えみたいところで、地域の若い方の参入も増えたと聞いてますがその辺はどういうふうにお感じですか。

清広さん

確かに今、太齋さんおっしゃるように、若い人も多く帰ってきましたし、今結構若い人の力が大きいです。一番は生産性が上がったっていうのが大きいので、以前は10キロぐらいしか（むき身）生産できなかったんですね、10時間で。今はもう6時間でも十分20キロとか、春になるとね、名人の方だと30キロぐらい、十分生産できます。あとはもう午前中に出荷を終え、午後は自由な時間。あと日曜日はもう完全に休業になりました。働き方改革にもなったっていうのは良かったんだと思います。

ファシリテーター（太齋）

この辺だとカキは殻をむいて出荷されるんですね。その殻むきの時間がかかりかかるということですね。次のスライドお願いします。

そして日本で初のASC取得に挑まれたわけですが、これにはどういう意味があったんですか？

清広さん

はい。ASC認証は実は私も全然知らなくてですね。NGOのWWFさんから紹介されたんですけども、最初はピンと来なかったんです。ただせっかくこう良い漁場を取り戻したのに、どうやって維持したらいいのかなって思ったときに、この認証を取ればずっと維持できるのかなって。そっちの環境を維持するツールかな、道具っていうような形で捉えていたんですけども、そしたら日本でどこも取ってないと。よく内容をよく調べてみますと、いや、これは大変な内容だなと改めてびっくりしたんですけども、とにかく挑戦しようということ。

ファシリテーター（太齋）

漁協の方々のサポートもあったと思うんですけど、その中で、先ほどの日曜日休みにするみたいなね、これ漁村としては画期的なことかもしれませんが、定休日ができたとか、環境に配慮した漁業を続けるという約束ができたということも、とても大きかったと思うんですよ。

それによって、特にお2人とも後継者がいらっしゃいますけども、後継者の方たちが誇りに思ったんじゃないかな？というふうに私は思ってるんですが、民子さん。その辺、お子さん帰ってこられて、後を継ぐことになられたとき、どういうふうにお家の中ではお話されてましたか。

民子さん

はい。うちでは私と主人で、漁業はやめようって震災前から言って、子どもたちもそれぞれ自立してたので、漁業は体が動く限りで終わりかなと思ってたんですけど、、、。震災後にこういう取り組みをして、うちの長男が、東京で仕事をして、それこそ働け働けだったんですね。もう帰ってくるのが10時とかっていう働け働けの会社員やってたんですけど、それが震災後に、この震災がきっかけで、実家の近くについていうことで仙台にきて。

それで自分が長男ということもあり、私達が工場を立てたっていうことと、私が自分で新しいことを始めたっていうことに、すごく息子自身が、口では言ってなかったんですけど、興味を持ってたらしく。それが自分の娘が今年小学校1年生っていうことで、学校どこにするかっていうことを去年あたりから結構考えたときに、やっぱりずっと働けだと、子どもを見る時間もないし、家族らしい時間ができないと。このまま共働きになっていくとね。でも田舎でこういう漁業をやって休みがあって、自分もすぐ子ども好きなんで、子どもに関わる時間が多くできるっていうことで、それで息子が思い切って。漁業をやったことない息子なんですけど、やってみっかなっていう感じで、去年相談されて。私達は何も反対することはないので、やりたいのであればやってほしいっていうことを言っていて。それで去年試して1年通いながらやったんですけど、海に行っても、昔の海を知ってるので全然違うなっていうのと、収入も全部見せてるので、こんなに違うんだっていうのが息子自身が驚いてますし、これだったら自分もこの先やっていけるんじゃないかなっていうのを、最近口に出すようになりました。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。こういうことが認められて、平成元年度の天皇杯、農林水産大臣賞の中の最高賞ですよ。これを受賞されたということで、本当におめでとうございます。

次のスライドをお願いします。

今、民さんは、震災後見るのも嫌だった海の仕事にまた戻られて、ご自分で販売の企業を立ち上げられましたよね。こちらちょっとだけご紹介いただけますか。

民子さん

はい。私はやっぱり、あの震災前は主人と一緒に船に乗って水揚げをやって、全部一緒にやってたんですね。やっぱり家族で、手数が必要なので、何もかもやらないといけなかったんですけど、それが震災後に、どうしても海には行きたくないっていう気持ちが強くて、、、。陸で自分でできる自分の居場所を作りたくて、そして立ち上げたんですけど、そこにはやっぱり子育て世代の仕事場も必要だなと思っ

て、それも仮設住宅にいたときに、子育て世代に仕事できるっていいなっていう話を聞いて、それで私ができることで1時間でも2時間でも仕事場になったらいいなと思って立ち上げたのと、後はこうやって、漁業者がマイナスから立ち上がった姿っていうのをやっぱり伝えていきたいなって思って。お店に並ぶと、ただのカキになって、値段で選ばれますけど、そこにはやっぱり作った人の思いとか、こういうことがあったんだっていうことを、私なりに少しずつですけど、発信できたらなあと思ってやっています。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。

今日皆さんのお手元にたくさんの資料を渡しましたが、3分の1革命の絵本とか、WWFさんが作られた資料とかですね、あるいは民子さんの海バックのご紹介もありますので、ぜひ後でご覧ください。

次のスライドをお願いします。

若い漁師さんたちもね、自分たちで工夫しだしています。カキって変な商材で、むき身にすると安くなるっていうですね、手をかけると安くなるっていう商材なんですけど、だから殻付きのままでも何とか売れないかということに挑戦されたりもしています。

こういった取り組みは持続可能な里海作りのモデルじゃないかと思ってんですけど、今日お2人にお越しいただきました。どうもありがとうございました。

質問は後で受付まとめて受け付けたいと思いますけども、続いて、里山の方ですね。先ほど申しましたように、南三陸は海と山の距離がとても近いんですね。その中で持続可能な里山作りに挑戦されている佐藤太一さんのお話を。

お待たせしました。南三陸では誰もが知っている佐藤家12代目。今日実はお父さんにもおいでいただいていますけども、その中でも太一さんは、実は南三陸で育ったわけではない？

佐藤太一さん（株式会社佐久・南三陸森林管理協議会（以下、太一さん））

そうですね。仙台。

ファシリテーター（太齋）

これ、どうして戻ってこられたんですか？その前は何されてたんですか？

太一さん

それまではですね、山形大学の大学院で物理学を専攻していて、宇宙放射線の研究、特に古い時代の放射線の研究をやってたんですけど、

そこから、震災を経て、震災直後にですね、うちの父から電話があって、家が全部流されたとか、いろいろ大変な状況で、多分親父1人じゃ難しいだろうということ。僕が博士号まで取ったら帰りますということで、2012年に帰ってきたって感じですね。

ファシリテーター（太齋）

家業が林業もやってらっしゃるということですよ。

南三陸町も8割が森林というんですか、森なんですけども、その中で多いのは、私のイメージでは手入れされない山、放置林が多かったかと思ってます。これを、林業をやってる佐久さんのは施業はどういうふうなものを目指してやってらっしゃるんですかね。

太一さん

そうですね。丁寧に間伐を中心に、山に光が入るような山作りをして、それプラス、目的とする植物、これでは杉以外の、いろんな植物や動植物がちゃんと住めるような山作りを目指してる感じですかね。

ファシリテーター（太齋）

その目指す過程でFSCの認証取得することだったんですね。これ前々から検討は南三陸の林業家の中でもされていたと思うんですけど、やっぱり踏み切れないでいたと思うんですよ。これ太一さんが進めようと思ったのはなぜですか。

太一さん

やっぱり僕帰ってきた時点ですね、町全体がまず持続可能なまち作りを目指すっていうのをベースに話が進んでいたというのと、そんな中でさっきも言いましたが山林が8割、そこをフィールドに林業従事者とか林業家は仕事するわけなので、林業自体も持続可能なものじゃないとまずいよねっていうのが一つの理由と。あと、それこそ震災前から「南三陸杉」という、ブランドを立ち上げてそれを推し進めていこうという流れがあったので、そのブランドを強化するというか、これから進めていく上でのそのベース作りとしてやっぱりFSC認証、信頼される部分として、ちゃんと押さえとかないといけないんじゃないかなと思って。皆さんにお声がけしたっていう感じですかね。

ファシリテーター（太齋）

左右の写真を比べていただくとわかると思うんですけど、右側だと下草が全くないから、大雨のときはね、土壌も流されちゃうんですよ。これは海にも影響を与えるということで、やはり山と海の繋がりということを考えると、山もほっとけないという。そこで登場されたのが太一さんだったんですね。

で、先ほどのバイオマス産業都市構想を出してから、そんなにかからずにね、ASCもFSCもその認証取得が実現したということで、すごいことだと思うんですけど、どういう戦略でそこにこぎ着けられたんですか。

太一さん

そうですね、一番初めの構想では弊社だけで取得しようかって話もあったんですけどやっぱり仲間作らないと、あまり意味がないなと思って。それで、経営計画っていうのを、林業をやる上で本来は作らないといけないものなんですけど、それを作ってるところを中心にお声がけして。一緒にやろうって思ってくれる人と手を組んで、南三陸森林管理協議会というグループを作って。この中には行政も入ってるんですけど、それで認証を取得したという次第です。

ファシリテーター（太齋）

よく地方の市町村ではね、行政が山を持ってることが結構ありますね。町有林とかね。そういうことで、一番の山主が実際、行政、町だったりするわけですね。そこもしっかり巻き込んでやられたという。ここがなかなかポイントですよ。

太一さん

そうですね。

ファシリテーター（太齋）

認証取得には結構費用もかかりますよね。そこの費用も含めてね。

太一さん

費用はちょっと裏技じゃないですけど、一般的には他の地域だと補助金とかを出してもらって、っていうスタイルが多いと思うんですけど、うちは、あくまで会費制で、その会費の査定方法を面積按分という形でやるので、（一番の山主である）行政（南三陸町）さんには高い会費を担ってもらいながら、続けられているという。

ファシリテーター（太齋）

今このぐらいの面積がね、FSCのFM認証を受けているということで、これ南三陸全体でいうとどのぐらいに当たるんですかね。

太一さん

面積ですか？20%くらいかな。12,000ヘクタールが南三陸町の全体の山林面積で、2,400ヘクタールなので、そのぐらいですかね。

ファシリテーター（太齋）

そのぐらいの面積が、持続可能な山づくりをされてるってことですよ。

これが広まると海にもいい影響がありそうですね。次のスライドお願いします。

これでちょっと簡単にですけど、町内でこの南三陸産の認証材を使った建築物も結構見られますよね。しかもこれがFSCのプロジェクト認証の全体認証っての取得されているという。

太一さん

そうですね、特に南三陸町役場と生涯学習センター、あと真ん中の民家ってこれうちの家なんすけど、この三つが全体認証を取得した物件になります。

それから他にもさんさん商店街のですね、全部ではないんですけど一部見えるところとか、ベンチとかですかね、そういったものと、あと、最近できた中橋。あれは加工まで、最後まで FSC で繋ぐことはできてないんですけど、原木は逆に FSC 認証の材料を使うっていうのを初めから指定してもらえた物件になります。

ファシリテーター（太齋）

町外でも、一番大きな、例えば国立競技場ですか、これどういった？

太一さん

これは宮城県代表として、南三陸町の杉、特に FSC 材を出すということで、ご指名をいただいて出荷できたという。その下は県知事の机ですね。これもご指名ですね。あと大会議室とか。左上はスターボックスの店舗とかですね。

ファシリテーター（太齋）

スタバの店舗の中で、こう、オブジェみたいな感じで？

太一さん

そう、なんか装飾として使っていたのと、あとフォーラス店のカウンターとかですね、そういうところで、使っていただけてますね。

その他にも、そうですね。いろんな資源とか活用できる部分、これも FSC の基準にも入ってんですけど、木材だけに頼らずいろんなものをチャレンジするというか、そういうことにも取り組んでいます。

ファシリテーター（太齋）

ASC もそうですけど、実はその、ブランド化を担う話ではないんですよ。ベースを作るといいますか、それを取ったから高く売れるって話でもない。そういうのはお三方、多分よくお分かりだと思うんですけど、その中で、コロナ下でもいろんな効果あったということをお伺いしたいのですが、そこをお話いただけますか。

太一さん

以前 FSC 取得した後に、やっぱり一番実績かなと思ったのは、宮城県では我々初めてなんで、宮城県内の流通が全くない状態を、さっきの役場庁舎を建てることや生涯学習センターを建てることで流通の基礎を結構組み立てることができて、我々は

その後 FSC を取った登米市さんと協力しながら、その流通を結構あの拡大することできたっていうのが結構大きい実績で。

なので、その後ですね、やっぱりコロナになったときに、一般的な材料は一時的に受け入れ制限みたいなのが起こって、丸太が自由に売れなくなってしまったんですけど、FSC 認証材だけは丸太を今までどおり安定的に、価格も安定した価格で受け取ってくれますというところがちらほらと出てきてですね、売れ残りが全くない状態で。コロナのその一番の危機のときを乗り越えられたという。

ファシリテーター（太齋）

他からしたらきっと羨ましい話だったと思いますね。ありがとうございます。

次のスライドをお願いします。

Yes 工房さんというね、町内の木工品作る一般団体のところでも、南三陸材使った製品をね。

太一さん

FSC の加工の認証を一昨年かな、ぐらいい取っていたいで仲間入りにしてもらってですね今は、本当に小物まで、FSC の認証製品作るようになってきますね。

ファシリテーター（太齋）

今日もバッチを売ったりもしてますので、ぜひ後で興味のある方はご覧ください。

パタゴニアさんとか、ラッシュさんの事例もちょっとご説明をお願いします。

太一さん

そうですね、パタゴニアさんも同じなんですけど、ラッシュさんとかそういった企業さんの什器とかにも、南三陸産をご指名で使っていたりすることが結構増えてきてますね。いろんな活動を通して、FSC をコミュニケーションツールとして使うことで、企業さんとの関わりみたいのが増えてきたという感じです。

ファシリテーター（太齋）

太一さん、ありがとうございます。

総合司会（浮ヶ谷美穂氏）

それではここまでの話を聞きまして、会長の方から何かご質問等あれば受け付けたいと思います。また YouTube でご覧の方々からの質問も受け付けておりますので、お寄せください。

お1人いらっしゃいますね。マイクをお持ちいたします。

会場から

発表ありがとうございました。FSC のことでお伺いしたくて、環境にもメリットがあって、需要もなくならなかったったということで、すごくいい取り組みで、メリットとかいっぱいあるなって思った一方で、現状 20%が FSC 林になってるってことで残りの 80%がマジョリティーじゃないですか。そういった人を今後どうやって巻き込んでいくのか。その 80%の人たちが、なんで今も一般の林業を続けているのか。現状をちょっと教えていただきたいなと思います。

太一さん

はい、ありがとうございます。逆に言うのですね、その 80%の全部だとは言いませんけど、林業を続けていけない。要はさっき見た放置された山のイメージだと思っていただいて。まさにそれが、それを FSC にする以前に、そこにちゃんと林業を届けるっていうのが今の課題になってますんで、これは南三陸だけじゃなくて日本全体の課題になってます。これをこの前、法律も改正して、山主さんは責任ある管理をすべきという法律に変わったのと同時に、行政がそれをお手伝いできるっていうような仕組み作りをなさいたいというのが、国の方針として掲げられて。今それを受けていろんな自治体が、山主さん、ノウハウがない人は例えば町に 1 回委託するとかですね、そういう仕組みを作るということを、今、日本全国の自治体が頑張ってるってところなんです。もちろん南三陸も、どうすればその受け入れられるか、そういうところを、山主さんから委託を受けられるか、みたいな仕組み作りは、行政と一緒に我々も作っているところ。もちろんうちらの場合はそういったところ引き受けられる状態になったら、ちゃんとした森林的計画を立てて、計画を立てたら今度はそれを FSC 認証の山林として登録して、国際基準に照らし合わせながら管理していくっていうようなスキームを今、思い描いている。目指しているところです。だから、最終的には全山責任ある管理できる。山にしていきたいなっていうのが将来的な野望ですね。

会場から

ありがとうございます。

ファシリテーター（太齋）

もっと聞きたいところですけど次の総合討論もあるので、残りは 3 分の 1 改革も含めてね、そちらでやっていただきたいと思います。ではお三方どうもありがとうございました。

総合司会

ここまで後藤清広さん、そして阿部民子さん、佐藤太一さんにお話を伺いました。ありがとうございました。

今のお三方のお話うかがいまして、やはり震災というものがありませんけれども、そこからどうにかして立ち上がるんだ、どのようにしていったら自分たちがまた輝きを取り戻せるのかというのを、非常に皆さん強くお考えになりながら進んでこられたんだなあということをととても感じさせていただきました。

それでは続いての方々をご紹介して参りたいと思います。まずは、今日一番最初に海と山のお話を伺いましたけれども、続いては里の取り組みについて、お話を伺っても参りたいと思います。

まず、お名前だけご紹介させていただきます。めぐりん米生産者の阿部勝義さんそして南三陸 BIO を運営されていらっしゃいますアミタグループの野添幹生さん、そして、液肥散布に参入されました山藤運輸の佐藤克哉さん、そして、生ゴミ循環の輪を広めていらっしゃいます工藤まゆみさんです。どうぞ登壇ください。

ファシリテーター（太齋）

では続いて、今度は里の方ですね。まずは、阿部勝義さん。よくおいでいただきました。

次のスライドをお願いします。

こちらが勝義さんが作られた「めぐりん米」ですよ。南三陸で作られた液体肥料を使って作られた米ということですよ。これ評判はいかがですかね。

阿部勝善さん（楽農家（以下、勝善さん））

こんにちは。おかげさんで、美味しいですということで好評をいただけてます。

ファシリテーター（太齋）

いつもね楽しそうに楽農家という肩書きで取り組まれてますけども、いろんな新しいことにチャレンジされますよね。その中で町が取り組んできたいのちめぐるまちの中の、液肥を使った米を作るという、これになぜ取り組もうと思われたんですか？

勝善さん

まずその液肥っていうものがどういうものか全くわからなかったと。

この後アミタさんが話をするんですけども、最初にいのちめぐるまち作りっていうようなことで進めてきたんで、そこで生ゴミを集めてバイオ発酵させてその時できる液肥ってどんなものだろうかと、これで米作れたら面白いだろうと、というようなことが最初のスタートです。

ファシリテーター（太齋）

やっぱりその楽しめるどころ、すごいなと思うんですけどね。

ここで簡単にバイオマス産業都市構想をご紹介したいと思います。最初の方でも出てきましたけど、南三陸は平成 25 年に町がたてた計画ですね。これちょっとわかりづらいんですけど、今は真ん中の部分のお話になります。普段の皆さんの生活の中で生ゴミってどうされてますかね？ だいたい燃えるゴミで出されることが多いかと思うんですけど、ただ生ゴミって重さの 8 割が水分なんですよね。8 割が水分ですから、水を燃やすために、エネルギーを使うという、わけのわかんない状況が日

本中で起きてる。これを震災直後にエネルギーに苦勞したこの町で、何とか町の中でエネルギーを少しでも作りたいということの思いと、それからエネルギーを無駄に使わないようにしようという思い、これらを考えたときに、先ほどの生ゴミを液肥にした循環ということが生まれてきたわけですけど、次のスライドお願いします。

まず住民の方が生ゴミを分別します。それをアマタさんが運営している南三陸 BIO（ビオ）というバイオガス施設に入れることでエネルギーと液体肥料に変換するわけですね。できた肥料は町内の田んぼや畑で使っていただく。そこで先ほど紹介した「めぐりん米」が生まれたということですよ。こういった取り組みをされたということですけど、南三陸では焼却場がないので、実はお隣の気仙沼市にゴミ処理委託されてたんです。そこでゴミを運ぶ仕事をされたのが、佐藤克哉さんの山藤運輸さんだったんですけど、そのときにゴミを減らすとなると、生ゴミ分別するからごみが減りますよね。これ、山藤運輸さんの的には仕事が減るじゃないですか。実際はどういう思いだったんですか。

佐藤克哉さん（有限会社山藤運輸代表取締役（以下、克哉さん））

そうですね

普通の会社であれば、自分の既存の仕事が減らされるということで、いや反対、絶対やめてって、今まで通りやろうよ、っていうのが普通だと思うんですけど、当時震災から2年ぐらいですかね。経過した時点でそういう計画が認定されたということで、その際に聞いたのは、やっぱり新しい未来を作る事業だなというふうに感じて。

当時、震災から2年たって、生かされた命をどう使うんだみたいなことを自問自答しながら仕事してたんですけど、やっぱりそういった意味では、変化に対応して未来を作っていくことが、町の事業者としては、使命じゃないかということで、そういった変化に対応する協力をしようというふうに思って参入を決めました。

ファシリテーター（太齋）

具体的にどんなことに参入されたかについては次のスライドお願いします。こちらこちらがアマタさんが作って運営されている BIO という施設ですよ。ここで生ゴミの処理をすると。で、この後生ゴミをどうするかっていうと、液体肥料の状態に液体になったものを綺麗にして川に流すか、あるいは全量を畑にまくか、この辺で大分差が出てくると思うんですけど、野添さんこれってコスト的にどうなんですかね。綺麗にして流すっていうのはかなり大変なんですかね。

野添幹雄さん（アマタホールディングス株式会社（以下、野添さん））

そうですね。やはり通常ですとバイオガス施設だと、排水処理施設を構えて、それを綺麗にして川に流すというのが一般的かと思うんですけども、弊社の方はそれを全量農地還元するということで、イニシャルコストですね、設備投資の方も抑えられますし、ランニングコストの方も抑えられるというような形で、しかも全部資源になるという形の事業モデルをさせていただいております。

ファシリテーター（太齋）

ただそこで問題なのは、液体なので扱いがちょっと難しいですよ。これ勝善さんにも聞いたけど、最初テストしたときに、液体のまきムラがあっとうまく育たなかったみたいなこと聞いたんですが、どうだったんですかね。

勝善さん

はい最初はね。私液肥まくっていったときに、まだ BIO が稼働してなかったもので、アマタの本社、京都の京丹後から陸送してきた液肥を使って、1枚くらいなら全部失敗しても大丈夫だなというようなことで、最初やりました。どうしても最初ね、ポンプアップして太いパイプで手撒きをした。アマタの社員が頭から液肥をかぶったりなんかしてやってくれたんだけれども、やっぱりどうしても多く落ちたところと少ないところっていうのがあって……。多く落ちたところは窒素成分が多くなって病気が発生するっていうことがあったんだけれども、その後、あの山藤さんが参入して散布してくれることによって、全くその撒きムラがない。肥料が均一に効いているんで、刈り取りの時期も、もういつっていうように、すぐに決められる状態まで生育しました。

ファシリテーター（太齋）

こちらが克哉さん自慢の散布車。これを導入することでまきムラがない、しかも農家さんはまいてもらえるというね、とても良い嬉しいサービスが生まれたわけですけど、でもこれかなりお高いですよ。

克哉さん

そうですね。1000万円近いですね。

ファシリテーター（太齋）

1000万円もするものを、自社で投資された、これ相当な決意だと思うんですけどこれどういう

克哉さん

やっぱりこの事業に参画するのはそういった未来を作るってこともそうだし、うちも手巻きで最初はやらせてもらってたりして、ムラが出るよねっていうのはなしを、勝善さんとさせてもらったりとか、農家さんとお話していくとそういった課題があると。であるならばこういう機械を入れて均一に巻けるように品質を高めるっていうことと、BIOの計画ではかなりの量を撒かなきゃいけないということもあったので、うちで働く人たちもやりやすいようにということで購入を決めました。

ファシリテーター（太齋）

ゴミを運ぶ量は少なくなるけどもこちらの液肥をまく方にシフトされたってことですよね。で次のスライド。こちら、かわいいラッピングされてますけど、これはどういう思いで？

克哉さん

はい。やっぱり液肥なので少しにおいは、生ゴミ・し尿汚泥から作っているので、少しにおいはするんですけども、さほどでもないですよ。なんていうかな、地域から厄介者扱い、液肥散布車が来ると臭くなるから嫌だみたいなじゃなくて、昔、佐川急便のあのフンドシに触ると、お金持ちになれるみたいな話があったと思うんですけど、そういった意味で「散布車が来た、あの人に手を振ると、みんな手振ってくれんだよね」とか、「これは循環の仕事をしてる人たちなんだ」ってわかるようにということと、やっぱり明るく、楽しそうに働いてるなということも含めてPRしたいなというふうに思って。キャラクター自体は工藤真弓さんの方で作っていただいたのをうちでラッピングして、可愛く、イメージアップのためにやりました。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。

では真弓さん、お名前出たので。液肥を撒くところできた。ただやっぱり課題として、家庭が生ゴミを分別しないといけないですよね。それによってその生ゴミの量が少ないと、なかなか事業が回らないということがありますよね。その中で真弓さんは住民としてそれに参加される中で、得意の絵を生かして支援の取り組みされるわけですから、何でこういう取り組みをしようと思われましたか。

工藤真弓さん（上山八幡神社禰宜（以下、真弓さん））

そうですね、町の事業として、バイオマス産業都市構想が始まったのが平成25年。そのときは、私自身の中でもそれは作業の一つでしかなかったんですよ。そういうエネルギーを生み出すまちにしようということでのやるのかという。多分多くの方が作業の一つとして与えられたバケツに生ゴミを貯金して、それを分別すればエネルギーになると。

その次の年の平成26年に。第2次総合計画でまちの将来像が決まるんですけども、そのときの将来像として「森里海ひといのちめぐるまち 南三陸」っていうフレーズが決まったときに、私の中で、どうやったらいのちをめぐらせられるんだろう？っていう思いの答えとして、手のひらに残った生ゴミを貯金することで、そのいのちはめぐらせることができるんだっていう、答えのような、取り組みがそれだったんだっていうふうに繋がったんです。それで少し捉え方を変えて協力を始めるわけですけども、やはりそのバケツを洗わなくちゃいけないとか、夏はかなり発酵して匂いが大変なことになるとか、いろんなご課題が1年を通して見えてきた。

けれども、やはりその、手のひらからいのちをめぐらせるってのは、すごく尊い命の授業だなんていうふうに思ったんですよ。それを1人でも多くの方に一緒にやっ

ていただくためには、楽しく発信するっていう切り口が必要だなと思って、いろんな工夫をし始めたということです。

ファシリテーター（太齋）

先ほどのわかりづらい産業都市構想の図も、真弓さんが描くところというふうになるわけですね。

真弓さん

そうですねあの、バイオマス産業都市構想っていうフレーズだけだと、すごく難しい世界だったり取り組みだったり、自分と関わりが遠いようなシステムなのかなというふうに思っちゃうけど、一つ一つ分解して、バイオだから、そのまま生命体の集まりを生かして仕事にしていこうという町の考えだよ、っていうふうに翻訳してあげるのが大人の役割だなと思うので、子どもたちに授業ではこういうふうな意識して伝えるということもしています。それによって見えてくるめぐりがこの町には三つあって、まず根本的な、バナナの皮をどうするかっていうところのいのちのめぐりを大事にすることで、山藤運輸さんみたいな仕事のめぐりが生まれて、それを育ててくれるのはこの森里海っていう大きいめぐりなんだよ、っていうことを客観的に見ることで、その一点が自分なんだよっていう。その一点もなければめぐらないんだよ、っていうふうに考えることで、自分の命も尊ぶし、他人の命もその中の一つとしてとらえれば、とても大きい命の授業ができる町なんじゃないかなっていう。それを面倒くさいっていうだけでないっていうのはす、ごくもったいない。

震災で亡くなった方への思いとしても、そういうのを大事にして町を作っていきたいっていうのは、みんなの共通の思いなので。それを楽しく発信するっていう、ということの一つに尽きるかなと思います。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。

今日は里海シンポジウムなんですけど、山の話とこういう里の話も含めて、これがやっぱり海に繋がってるという意識を皆さんお持ちだということをお分かりいただけたかなというふうに思います。

こういった形で南三陸では生ゴミ処理をしてますと。真弓さんとか克哉さんとかあるいは勝義さんの農業の取り組みがあって、現在どうなってるかというのを次のスライドでご説明いただけますか。

野添さん

住民の皆様のご協力であるとか、飲食店のご協力をいただきまして、昨年実績ですと、年間380t、だいたい1日に1t強の生ゴミを回収できているという状況でして、真弓さんの紙芝居であるとか、めぐりん米の効果もありまして、生ゴミの回収量としましては、開設当初よりも1.66倍ぐらいに増えてきているというところです。

住民アンケートを全戸配布させていただいて、皆さん分別どうかなというところを伺ったところ、割と参加いただいてまして、75%ぐらいの方が分別をしてくださっているということがわかってきました。最初、太齋さんからご紹介あったとおりに可燃ゴミかどうなっているかということも、震災でちょっとでこぼこあるんですけども減ってきているし、可燃ゴミの処理費としても下がってきているというような効果が得られてきたということがわかってきております。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。次に液肥の利用の面ですね。こちらはどういうふうになってますでしょうか？

野添さん

はい。今、全部農地還元をしているというところで、町内の農業者様にご利用いただいているんですけども、全部で280反ぐらい散布させていただいてまして、多くはお米の利用に使われているという状況です。今後、畑での利用ということも増やしていきたいなというところが、液肥散布の課題感としてある形かなと思っております。

ファシリテーター（太齋）

はい、ありがとうございます。

克哉さん、社内で農業に関わるようになってから、例えば社員の方に変化が起きたみたいなことも伺ったんですが、それはどういった変化だったんですかね？

克哉さん

そうですね、うちは運送業ではあるんですけども、やっぱり BtoB 輸送が多いので、圧倒的にありがとうって言われる機会が少なかったんですよ。それが私もちょっと感じていたんですけども、つまり、あんまりありがとうと言われないのでやりがいを感じてないと。いうところで、ただ必要な縁の下の力持ちであることは間違いないというふうに自負しているんですけども、そういった思いがずっとくすぶって

いて。液散布では、みんなチームでやるんですけども、チームでやることと、農家さんと直接やりとりをするわけですよ。 「このように撒いてくれ」「わかりました。このように撒きました」と。そして、収穫時期になると、「君のおかげで、こんな美味しいお米が取れたよ」とか、「トウモロコシを取れたからこれ食べてみろ。」ってもらえて、しかもそこにありがとうという言葉がついて、お客さんから直接感謝されることが増えたっていうことと、やっぱりお客さんの農家さんとの関係性ですよ。ということでやりがいの創出に繋がったかなというふうに思っています。

ファシリテーター（太齋）

ありがとうございます。

勝善さん、最後に、まず農家さんたちもだんだん高齢化が進んでくるので、やっぱり肥料を撒くのも結構大変なわけですね。その中で山藤さんみたいところが、そういうところに参入して、町内循環の中で、液肥散布もしてくれるっていうのは、その辺りは助かってるところですかね？

勝善さん

そうですね。化成肥料を田んぼに散布するっていうのは、一袋 20 キロなんですよね。それを背負って、田んぼが乾いていけばいいんだけども、ちょっとぬかるんでいると、そこを背負った状態で散布するっていうことはかなりの重労働なんですよね。それが液肥を散布することにおいて、そういう重労働から開放されるっていうのがまずすごいメリット。今、田んぼの状態いいから、今日撒いていいよっていうようなことで、常に密に連絡を取り合って、ここの田んぼもいいからとかそんな感じで、すごく助かってる。

あとはね、液肥をまくことにおいて、お米の食味もそうなんですけれども、化成肥料と液肥を比べた場合に、農家が手出しするお金の金額が大分変わってきて。体が楽で、肥料代も従来より掛からないっていうことで、農家にとっては本当に最高の液肥ですね。

おかげ様で、この度「南三陸めぐりん米」というようなことで、商標登録ができたので、新しい南三陸のブランド米ができたので。海の ASC に負けていたんだけども、里も頑張ってたからね、っていうようなことで、今度できて本当に嬉しく思っていました。

ファシリテーター（太齋）

これぜひご紹介いただきたいんですけど、町のどこで売ってらっしゃるのかと、どの辺が美味しいって感じるのか。

勝善さん

さんさん商店街のさんさん市場っていうところで販売してるんですけども、お米をおかずにご飯が食べられる、ご飯おかずにご飯が食べられる。で、家計にも優しいお米ですよと、いうようなことで、それを売りに売ってるわけではないんですけども。美味しいっていうのは私が判断するんじゃなくて買ってくれて食べた人が判断することなんで、ちょこちょこ売れてるんで、まあ良かったかなというふうに考えてます。

ファシリテーター（太齋）

このめぐりん米も真弓さんデザインですよ。このマークが目印ということで。この説明だけ最後をお願いします。

真弓さん

この会場にめぐりちゃんも来ましたので、はい、呼んでみたいと思います。「めぐりんちゃん」「は〜い、めぐりんです！いのちはつながっているのよ！」。すみません。ということで、紙芝居の中に登場するこのめぐりちゃんなんですけども、子どもたちにいのちがつながってるってことをお話するという紙芝居の主人公です。

このめぐりちゃんを生み出したときに、勝義さんの液肥米が生まれて。でも、液肥米っていうよりも、いのちがめぐってできたそのおかげで栄養が授かって、そして次のいのちに手渡されているお米だよ、っていうことを伝えるには液肥よりは、めぐりんちゃんの「めぐりん米」の方が食べた方の中にもいろんなストーリーが巡るんじゃないかということでご提案をさせていただいた。そして勝善さんはすごくそれをいいねって言うてくださって、それでシールになったという。

ファシリテーター（太齋）

はい、めっちゃ皆さん食べたくなったと思うんですけど皆さん市場で売ってますので、お買い上げいただければと思います。4名の方ありがとうございました。

総合司会

それでは1問だけ、質問ですね。はい。それでは会場の皆様方そしてYouTubeでご覧の皆様から質問があれば、手を挙げていただけますでしょうか？

会場から

すみません国際エメックスセンターの専務理事してます春名と申します。よろしくお願ひします。2点お聞きしたいんですけども、この分別にさっき75%の方がご参加されてるということでグラフで出たと思うんですけども、逆にまだあと4分の1ぐらいまだなかなか参加が難しいということだと思ひますが、理由とかですね、もしおわかりでしたら教えていただきたいのと、それから、経費的な話なんですけど全体の話の中で、農家の方は最後はお米を売られているのでそこで収益が上がるのかと思ひてるんですけども、実際の生ゴミを収集運搬して液肥にする経費ですとか、そういった建物を建てられたときのコストですとか、かなりかかっていると思うんですけど、その辺の経費的なところはどのような形でペイされているのかなっていうのを教えていただければと思います。

野添さん

はい。まず、あと25%の方に参加いただくところの課題感というところですけども、やっぱり分別の手間とか、あと匂いですね、そういったところの課題感がまだあるのかなというふうにはアンケート上は出てきているかなというところがございます。それらを解決するためにですね、一旦その、前までは生ゴミを家でためておいて、週2回出してもらっている仕組みだったんですけども、それをいつでもバケツをいつでも置いて、いつでも出せるような取り組みに変えて、3割ぐらい生ゴミの回収量が増えたというようなところで、少しずつですが参加率を上げていているというところがございます。

経費的などころに関しましては、確かにこのプラントは非常に高額の投資にはなるんですけども、バイオマス産業都市構想を描いていたことによって農水省様からの補助金をいただいたり、あと町の下水処理場が震災後に使われなくなっていたというところがある中でそちらを利用させていただくような形で設備投資を抑えていったというところがあるのと、事業上は、町のゴミ処理経費の中で我々が委託費としていただいて事業を運営しているというような形の事業モデルになります。

総合司会

はい。ありがとうございました。

4名の方にまた大きな拍手をお願いいたします。阿部さん、佐藤さん、工藤さん、野添さん、ありがとうございました。

皆さんにたくさんお話いただきまして、時間も押してまいりました。

それではお名前だけご紹介させていただきませんか？お2人大学の同期というお話なんですよ。そういったお話も中では出てくるかもしれません。

はいそれでは改めてご紹介させていただきます。このセッション1最後のご登壇となりますのは早稲田実業学校初等部教諭の宮田新作さんです。早稲田実業と言いますと、私なんかやっぱりあの高校野球の清宮選手というようなイメージなんですけど初等部なので小学校の先生ということですね。東京都の国分寺にあります小学校とこの南三陸がどのように繋がっているのかお話いただけたらと思います。では、ご準備よろしいでしょうか？お願いいたします。

宮田新作さん（早稲田実業学校初等部理科教諭（以下、宮田さん））

はい。今、期せずして清宮くんのお話出ましたけどうちの小学校の卒業生で、今年なんとイースタン・リーグのホームラン王になったという。2軍で大活躍で来年は1軍に出てこないかなっていう、清宮くんも私が教えた1人なんですけれども、東京にあります早稲田実業学校初等部の理科の教員をいる宮田新作と申します。今日はよろしくお願いたします。

早稲田大学附属系属の私立の小学校で、赴任したのが震災前年の2010年で、今年で11年目になります。先ほど太齋さんにとってことなんですけども、30数年前にですね、同じ日に同じ学科の入学式卒業者の出席したという。

そこが関係の出発点でその後の深い繋がり、南三陸との繋がりが出発点が30数年前にあったということで。ただ学生時代はですね同じ生物学類に属してはいたんですけどもですね、会話をした記憶が一度もなくですね、お互いを認識したのは卒業後ということで。また後ほどお話に出そうと思うんですけど、高校生講座というのが、この町でありまして、太齋さんが主催者で私が応援スタッフと、そういう形で関わらせていただけてきました。

途中あの震災が挟まるんですけども、また私がこの今の小学校に移ってからはですね、海藻おしば講座に来ていただいたりとか、あとは魚のサケをプログラム化するというので、一緒に考えながらプログラムを作っていたり、そして今日お話をさせていただくフィールドワークですね、南三陸フィールドワークというのを一緒に

企画立案、そして実施していくと。そういう仕事を通じた交流を続けさせていただいているとそういう関係でございます。

前置きはこの辺にしましてですね、今日は里海カンファレンスということですので海がね一つのキーワードだと思うんですけども、先ほどのお話なんかにもあります山であるとか里というものも含めて、我々が実践している実習というかフィールドワークと呼んでますけれども、その紹介をささやかながらさしていただこうかなと、お腹もすいてきたところですので気軽な気持ちで聞いていただければなというふうに思います。

本校では、行事名としてはですね一番上にあります「いのちめぐるまち南三陸フィールドワーク」というそういう行事名でやっております、夏休みにですね特定の学年が全員で参加するというのではなくて、希望者を募りまして、つまりは意欲的な児童保護者を対象にした夏休みの希望者対象のプログラムだとそういうことです。4年生5年生6年生の3学年に募集をかけまして、毎年8月の初旬、3泊4日で、この南三陸にお邪魔しているということです。2016年から始まりまして、徐々に参加者なんかも増えて、プログラムも充実していたところなんです去年、今年とちょっとコロナでやむなく中止ということで、今のところ4回、6年前から始めて4回実施ということで、それでもですね多くの児童保護者に素晴らしい体験してもらっているところです。

これは校内の文章なんですけれどもこんな形で募集をかけてやっております。

フィールドワークで辞書を引くとですね、一番上に書いてあるようにですね、「調査研究などで、そのテーマに即した場所実際に訪れた衣装を直接観察すること。そして聞き取り調査や資料の採取などを行うこと」、新明解国語辞典にはこう書いてあります。

で現地に行くってということ、それからテーマに即した場所ってその辺がちょっとキーワードかな、なんて思いましてやりたいと思うんですけども。現地の人からってということで、同じ話を例えばこういう生物がこうだとかですね物質が循環してるってことを教室で理科の教師の私がこう喋るのとですね、やっぱりその現場その現場の人、現地の人に説明してもらってというのはもう格段に説明の説得力が違うなというふうに思ってます。もちろんその現場の形式現地の形式それから空気感、それから現地の多少なまりを含めた言葉ですね、そういうもので語られるってことがですね、教育上非常に重要なと五感で感じるなんて書きましたけれどもそんなところがですね、一つの効果かなというふうに思ってます。現地に行くってもののにちょっとしたワクワク感っていうんすかね、移動時間も含めたところがそこから行事が始まるかなということ、今飛行機でも新幹線でも乗ればすぐいろんなところ行けるんですけども、この南三陸はちょっと遠いというところがですねまた良いところで、長い時間バスに揺られてくるところになんかどんなところなんだろうっていうそういう想像ですね、家族と膨らませられながら膨らましながら来るという、ちょっと遠くに来た感ですよ。その辺もこの南三陸のいいところかなあなんていうふうに思っております。

それでテーマに即した場所ってということなんですけれどもこの南三陸があの志津川町と呼ばれていた頃ですね。その頃からこの場所は優れた海洋実習の場だったとご存知の方たくさんいらっしゃると思うんですけれども、町営の施設であの自然環境活用センターというのがありまして、そこがあの研究とか教育とか普及とかそういうものになっておりまして、そこの主催で高校生講座、そこにちょっと小さく書いたんですけど、高校生講座っていうのを2010年から10年間にわたってやってきました。

で10周年お祝いした後に2011年に震災が来たと。そういうことなんですけれども震災で立派なあの実験室であるとか、それから貴重な資料なんかも失ってしまったわけなんですけれども、幸いだったのが太齋さん含めてスタッフが皆さん無事で、ノウハウだけは残ったということです。震災から5年経ちまして、私の立場っていうかね、いち理科教師として何か学びの場を復活させたいなと、そういうことぐらいしか自分にはできないななんて思っておりまして、そうこうしてるうちに今の小学校に転勤したんですけれども、そこで新たな何か学びの場を、南三陸で学ぶ場を復活させたいなというそんなようなことで、太齋さんと相談を始めたのが2015年ぐらいだったと思います。

当時はですね、1行目にあります海洋実習、高校生講座がそうだったんですけども、海洋実習をイメージして、海の勉強みたいなそんなようなことでできればな、なんて思っていたんですけれども、その震災を経てこの南三陸はですね、海だけでも十分魅力的なんですけれども、また別な教材を用意してくれる、そういう町に生まれ変わっていったっていうのが私の実感です。下2行にあります海だけでなく山がある、山があるってことは海と山の繋がりが学べる。そして一つ前にご登壇された方々の里があるというね、人の暮らしてっていうか、そういうものまで全てが一つのシステムとして捉えられる、そういう場を提供してくれているというのがこの南三陸ということで。あのシステムって、系ってよく言うんですけれども、これも辞書引くとですね「互いに作用し合ったり関連を持ったりする多数のものからなるひとまとまり」、まとまりっていうそういうふうに辞書には書いてあるんですけれどもそういうことをですねこの町が提供してくれる、そういう町に変化していたというのが素晴らしいところだななんて思います。

それであの系というシステム・系ってということが繋がりっていうふうに思います。繋がってるっていうことは、何て言うんすかね、姿を変えながらですね転々と、また移動していく、移動していく中でまた元に戻ってくるっていう、そういうのがこの系・繋がりっていうところから見えてくる考え方じゃないかなあとと思います。その物質が移動したり、それからエネルギーが移動したりっていうそういう中にこの命、生命が乗っかって物質、それから生命、それからエネルギー、そういったものがぐるぐる回っているという。

これをひらがなのめぐるというふうに表現したことで、これ漢字で書かないところがまたいいんじゃないかななんて思うんですけれども、このめぐるというそういう

素晴らしいネーミングですねそれが、このいのちめぐるまちという。これどなたが考えられたのかこの中にいらっしゃるのかもしれないけど、なかなかいらっしゃる当事者の方がいらっしゃるのかな？非常に素晴らしいネーミングじゃないかなというふうに私は思っています。

我々の学校の行事名もこの「いのちめぐるまち」ってつけること長くなっちゃうんですけども、参加する方はですねこのいのちめぐるまちの意味がちょっとピンとこない。今日初めてお聞きになった方もちょっとピンとこないところあるかもしれないんですけども、4日間の実習を終えて終わってみて、そういうことなのねっていう、そのいのちめぐるまちの意味を深く実感して帰路につけるといいうそういうなかなか絶妙なネーミングじゃないかなと。こういう言葉があってね、行事もよく理解できるようになってるんじゃないかなというふうに思います。

それでフィールドワークの地としての南三陸ということで、今三つほど挙げさせていただいています。①番目が繋がり視点ということでこれ先ほど申し上げた物質循環・生命循環・エネルギーの流れとそういうことが見えるそういう場所だということです。②番目は、やっぱり生きた教材、現在進行形の教材ということで、あの震災というものすごい大きな出来事があって、その後の変化をやっぱり目撃できる、そういう場だと。ちょっと東京目線になっちゃうかもしれないんですけども毎年毎年こう変化をするのが目撃できるという。

東京にいますとですね、震災のときに復興のボランティアに参加したかったけど行けなかったなんていう方も実はたくさんいて、本当は関わりたかったけれども実際にはそういうこと等アクションとしてできなかったというかたくさんいて、でそういうその変化を自分も本当は共有したいんだっていうそういう人たちがうちの学校の保護者なんかにもたくさんいてですね、その変化を体感したい、共有したいという人がたくさんいてそういう人たちの一つの受け皿にもなっているという感じがします。

そこには体感っていうことでちょっと書いたんですけども、また後でこの言葉は後でもう1回出てくることになってます。③番目の定点観測の場所としてのフィールドワークっていうことなんですけれども、私このフィールドワークの最終日ですね、まとめの中で毎年毎年見に来ることで、その定点を観測することで見えてくるものってたくさんあるよっていう、そういう話をさせていただいて、また是非この町にもう1回来てくださいと。実際来ることができなくても、ぜひ気にかけてこの先来てくださいということで、子どもにもそれから保護者にもお伝えをしてそれで講座を終えているんですけども、なんていうんすかね、変化しているからこそ見て毎年見ていくそして変化で学ぶ、その変化自体が学びの場になっているということですね。そういうフィードバックの地としての南三陸ということで。学校で過去4回やったんですけど、4回連続、4年連続参加という強者のご家庭もありまして。もうとにかくね毎年来たいと、もう都合が合えば毎年来たいというリピーターがたくさんいるというか、それもまたこの町の魅力の一つですしプログラムの完成してるかどうかわかりませんが、プログラムの一つの魅力なのかなということ。最後はもう純粹にもう南三陸大好きになっちゃって、東京に帰っていくと、そんなような状況になっております。

これが学びの場としての南三陸という、一つのこれまとめです。

次にですねこれ親子実習ということで、「親子」でやっております。これ宿泊を伴う行事なので、寝泊りとか食事とかって特に小学生なので結構大変なんですけれども、家族と一緒にということで、子どもたちは安心して、日中の活動に集中することができます。でまた、保護者の目線からするとですね子どもと同じ講義を受けて同じ作業をして、同じ活動をするという。

これ親子の思い出作りには最高です。親が学んでいる姿っていうのを子どもが見るという、これも意外と貴重で、親はよく子どものあの授業参観で子どもの学んでいる姿を見るんですけども、子どもが親の学んでいる姿を見ることってのは意外とあの少ないんじゃないかなというふうに思っています。

で親子で同じ講座を講義を聞かせるということは、その理解の仕方がその家庭ごとにですね違って、例えば今聞いた話ってこれお父さんがこないだ言ってたあれだよねとか、おじいちゃんと話したあれとちょっと関係してるよね、とかってその家ごとのやっぱり会話っていうのがあって、子ども1人ポツンとこういると、そこまでの共有ってできないと思うんですけども、隣にお父さんお母さんがいることで、その過程に応じた学びの深まりっていうのが得られるという、それもすごいんじゃないかなんて思いますということで親と子の学びの深まりというのもこの実習のいいところかな一つかなというふうに思います。

これ内部文書なんですけども、こんなことでやってましてちょっと偉そうなんですけど、10年後20年後を見据えたプログラムですよという打ち出し方をして募集をかけております。

これが実際のプログラムです。3泊4日なんですけども1日目の午前は移動で、それから午後にガイダンス、このホテル観洋の会議室をかりまして、ガイダンスをやりまして、町の様子を説明します。

2日目から怒涛の実習が始まるんですけども、2日目は主に海のことをやります。写真にありますとおりですね、目玉の一つは船に乗ってカキとか、それからホタテの養殖の施設なんかを実際に見ていただくという、これがちょっと売りの一つではあるんですけども、漁業体験、カキ・とホタテの養殖施設見学でありますとかプランクトンネットも引きます。これは実は山との繋がりを理解する上でとても重要な作業になっています。磯観察なんかをやったりして、午後は今度は実験室に入りまして、解剖ですね、生物観察、ホヤとかカキとか、そういったその年によって違うんですけども、生物を観察解剖すると、午後にご登壇される阿部拓三先生に、講義というかですね、レクチャーもいただきながら、それからプランクトンの観察なんかも含めて、このプランクトンがこの海を支えているんだよってということ。で、そのプランクトンがどこから来るのかねみたいなことをちょっとささやいて2日目が終わるということです。

3日目は今度、一転しまして山とか里の話です。午前中に先ほどお話にありました南三陸 Bio の見学をさせていただいて、そこに写真がありますかね。アミタさんの

施設にお邪魔して、例の散布車なんかも去年初めて拝見させていただいたんですけども、そういう南三陸 Bio のこと、それから阿部勝義さんの畑の畑とか田んぼにも訪問させていただいて、ここでとれたお米がめぐりん米って話もさせていただいてます。午後には山のこと、海と山の繋がりということで、最初にご登壇された佐藤太一さんに講義させていただいて、太一さんのご所有の山に行つてということで、実は今日いらっしゃる方、実は皆さん先生で、我々のフィールドワークの先生がこの場所にたくさんおまして、非常にいつもお世話になっております。

最終日がまとめということで、これまたホテル観洋さんの会議室をお借りしまして一人一人ですね、どんなことを学んだのかっていうことを、子どもも大人も等しく持ち時間がありまして、全員が一人一人発表するということでまとめをしております。

ということで、総合的な学びとか現実的な学びということでやっております。

ここでビデオでますかね。私ばかり喋ってるのもあれなので、実際に参加された方のお話を動画で用意してありますのでご覧いただきたいなというふうに思います。

ビデオレター

「私がすごく印象に残っているのは、南三陸町で出た廃棄物などを処理し肥料にしたり燃やして電力にしているというお話です。町全体で SDGs に取り組み、よりよい町にしていこうとするまちの姿に感動しました。私自身がこれからの人生で役にたかれるようなことをたくさん知りましたし、本当に楽しかったです。」

「いろんな思い出がありますけども、例えば養殖業ですね、養殖事業の再生ということについてお話を伺っていてですね、結果として労働時間も減って、個々の利益も増えていくという結果になったということを知っていてですね、まさにこれからの日本のあるべきですね、未来の形、未来志向のですね、持続可能な社会、新たな資本主義の一つの形を垣間見ることができたということで。そこでもやっぱりコミュニティの大切さであるとか、人間のたくましさというものを実感できた次第です。

私の個人的に好きな言葉で「早く行きたいなら 1 人で行け、遠くまで行きたいならみんなで行け」というアフリカのことわざがありますけども、まさにこうしたコミュニティということで、みんなで本当に力合わせていくということによってですね、そういう力強い社会にどんどん変わってきていると、変わることができるんだということを経験で体験、体感できたということがですね、今でもそうですけども、未来志向の話を経験するときにもですね、その共通の基盤になっているというふうに思っております、非常に良い体験をさせていただいたと思って感謝しております。」

「南三陸に行ってみて、温暖化の影響で海が暖かくなって、大きなエビを見ました。そのエビがきて大変だなあと思いました。」

「私は海でプランクトン採集をしたことが一番印象に残りました。少量の海水なのに、ものすごい量のプランクトンがいて、それぞれが元気に動き回っていて、すごくびっくりしました。そして夕食にアワビが出てきました。そのアワビは昼間見たプランクトンを食べているんだから美味しいんだなと思って、すごく感動しました」

「親子4人です、我々は体験させていただきました。で今なお、一度行かせていただいた経験ですけれども、そういったことを家族4人で話し合いをしながら、またこういった機会をいただけているということ自体が、我々自身家族の財産だとして捉えさせていただいております。こういった経験をですね、一つ一つ自分の中に落とし込みながら、家族としても成長させていただけるいい機会をいただいたと思っております。」

「このプログラムに参加してみてやっぱり一番すごいなあと思ったのは、山も海も里山も全てが目に見える場所にあって、この子たちの将来、日本をどうしていかかっていうことえお考えるのにすごくいい場所だと思ったんですね。私はやっぱり地球の環境のことがすごく心配なので、この子たちが小さい頃から都立の里山のプログラムにいろいろボランティアで参加してきたんですけれども、やっぱりそういうところは里山しかないんですよ。ただこの南三陸というのは、その里山で使った農薬であったり肥料の成分が、流れていった先に、ホヤやアワビが育つ海がある、そしてその海に流れる川というのは、やっぱり山でできていて、その山で活動する人たちの活動もみれる。これはもう素晴らしい場所だなと。その繋がってるということ意識できる素晴らしい場所だと思ったんですね。なので、何度もやはり足を運んで、今年はこういう活動がこういう影響を及ぼしたとか、そういうところまでみさせていただけ、勉強させていただける素晴らしい場所だと思いました。」

宮田さん

ということで参加者の実際の声ということでですね、見ていただきました。最後に我々東京から来た利用者の視点からということで、このスライドで終わりたいと思うんですけれども、総合的で現実的な学びということで、よく学校では総合的な学びってというのは流行りでよくやってるんですけれども、各校でいろんな取り組みしてると思うんですけれども、その3泊4日で、コンパクトにとりあえず一つ完結するという。これは一つ、素晴らしい学習かなというふうに思っております。今度、保護者の視点からするとですね、世の中の現実を知った大人がですね将来への不安とか期待とか、そういったものがモヤモヤとしてある中で、今起こっている変化をこう垣間見れる現場がこういうところにあったのかと。

近い将来自分に関係しそうな現実的な学びって書いたんですけども、何かこう、頭ではわかってたり見聞きしたりしていることはあっても、やっぱり自分で体験してこういう町でこんなことやってるんだという、そういう現実的な学びができる、そういうことを体験できる場というのが、この南三陸の素晴らしいところじゃないかなというふうに思っております。

コト消費なんていうんですけれども、その経験をするとということがこの場、この南三陸でできることの一つかなと思います。

最後に今後に向けてということで、やっぱりもう、今日ご登壇される中にたくさん
のね、優れた先生方、指導者の方いらっしゃるんですけども、それをやっぱり次の
世代に伝えていくという。学校の行事としてはですね継続性とても大事なので、受
け入れ先の体制というのは非常に重要なので、若い方、今日もたくさん若い方いら
っしゃってるんですけども、そういう方が次の担い手になってほしいなと
いうふうに思っております。

最後にちょっと考えてきたんですけども、今、社会で起こっている変化を目撃し
ている、その場に立ち会ってるっていうんですかね、先ほどの動画にもありました
けれども、何か今自分が見聞きしている、ここで勉強していることは、何かすごい
ことなんじゃないかなっていう、時代の変化の目撃者になっているみたいなそんな
感覚が皆さんあるようで、それを現地に来てこの南三陸で頑張っている人たちと一
緒に体感するというね。体験と体感がまたちょっと違うんじゃないかなというのが
今日ちょっと私がお伝えしたいことの一つなんですけれども、体感する、何か一緒
にこうやってるといふ、そういう感覚を持てるというのがこの町の凄さかなとい
ふふうに思っています。

マーケティングの用語なんですけれども、モノ消費の時代からコト消費の時代なん
て言うんですね、所有から経験へということですね、時代が変わってきて、最近
は今度 2010 年代はトキ消費なんていうふうにですね、博報堂の受け売りなんですけ
ども、こんなふうに言われているそうです。代表的なこととしては、ハロウィンと
か音楽ライブとか、その日その場で一緒に何かこう時間を共有するみたいな、そう
いうことに消費のトレンドが映っているというのが最近のことらしいです。ちょっ
とこれになぞらえて考えるならばですね、時代の変化を一緒に目撃している体験し
ているっていうのが、まさにこれがトキ商品に当たるのかなという。単に何かを一
緒に経験すると、体験だけじゃなくて、この時代の目撃者になっているというか
ですね、そういう感覚を持ち得る場所だっていうことを、もう少し打ち出しても面白
いのかなと。我々はやっていく中でそういうことを感じておりますので、そういう
コト消費の次、次ですよみたいなそんなような感じで打ち出していくのもいいんじ
ゃないかななんて、そういうことをこのそのうち太齋さんとお話しようかなと思っ
て、今日は用意してきました。

総合司会

宮田さんにお話を伺いました。たくさんのお話ありがとうございました。それでは
セッション1の締めくくりとして再び皆さんにご登壇いただきまして、総合討論に
移りたいと思います。セッション1でお話をいただきました。後藤さん、阿部さ
ん、佐藤さん、阿部さん、野添さん、そして佐藤勝哉さん、工藤さん、今一度ステ
ージの方にお越しく下さい。どうぞよろしく願いいたします。

そして宮田さんのお話の中でもありましたけれども、南三陸町というのは震災後い
ち早く教育旅行といいまして、震災で傷ついた町を皆さんに積極的に見ていただい
て、それでそこから何かを学び取ってほしいということをした町なんです。

ですのでそういったね、震災で傷つきましたけれども、それを教訓にしてまたよりよい町、それから日本でこれからの時代を作っていくってほしいと、そんな思いというのがこの町にはたくさんあるんだなということ私も常々感じておりました。

それでは、場所の方はよろしいでしょうか？

ファシリテーター（太齋）

はい段取り悪くて時間が押してすいません。10分だけお付き合いいただければと思います。皆さんご発表ありがとうございます。ご質問あればぜひ。時間の限りできるだけお受けしたいと思いますがいかがでしょうか？

会場から

すいません三重から参りました太田と申します。

3分の1革命のところちょっと教えていただきたいんですけども。素晴らしい取り組みだと思うんですけど、カキの方でイカダ減らしてですね、それでも収穫量も変わらない、手間も下がったというお話だったんですけど、普通に考えると、収穫量が上がっちゃうと、手間も増えちゃうような気がするんですけど。

その経費ですとか、手間を削減した別の取り組みと一緒にされてるのかなと思ったりしたんですけど、その辺もしありましたら教えていただけると嬉しいです。

清広さん

はい。

実はですね、生産量が増えて生産性が上がったっていう話なんですけども、実はですね、大量生産ばかりやってますと、一次産業の方は検討すると思うんですけども生産、食品ロスっていうのは皆さん知ってると思うんですけども「生産ロス」っていうのもあるんですよ。商品にならなくて廃棄してしまう。

そういうような、無駄なもの必ず出るんですけども、今回1年もの、1年での収穫を目指したときに、ほとんど生産ロスが出なくなったんですね。それで生産性がもう2倍にも3倍にもなりました。私達は大きいカキを作るのに、大きい殻だけを作ろうというふうなことで、どんどんどんどん大きな殻を作るのに神経を注いできたんですけども、カキっていうものはきちんとした栄養のある、環境の良い海であれば、殻は小さくてもしっかりした身を作るとそういうことがわかったんですね。

カキは次の産卵のために、栄養ためてしっかりした身を作るんですけども、それでほとんど生産ロスが出なくなりました。そして殻も小さいですし作業も楽、歩留まりもものすごくいいんで、生産性も上がった。思った以上にいいことが起こりました。環境を考えて始めたんですけども、今までは量ばかり追ってたんでどんどんどんどん悪循環だったんですけども、今はもう好循環が生まれ、生産量上がりましたし、労働時間も減りましたし、後継者もできましたし。どんどんどんどん好循環になっていったんですね。

ファシリテーター（太齋）

ですから捨てるものがなくなったってことですよね。むいてもむいても捨てる量が、要はロスになっちゃうんですけど、それがなくなったと。

清広さん

(むき身で) 10g 以下だとなかなか商品としての価値がつかないですし、5g を下回りますと、商品価値がなくなって廃棄したり、となってしまう。今は、ほとんど全て 10g 超えますんで。以前なら 3 年で 15 グラム程度しか育たなくなったものが、今はもう 1 年超えて次の年の 5 月ぐらいになりますと、30 グラムとか 40 グラムが主流になりますので、本当にその成長にはびっくりです。やっぱり自然の偉大さですよ。

総合司会

はい。それでもう一つ後藤さんに質問なんですけれどもこちら youtube のコメントからいただいております。カキの生育期間を 3 年から 1 年に考えたのは、その理由なんですけれども、1 年でも良いカキができた経験を持っていたからなんでしょうか? ということなんです。あともう一つ、もともとカキ養殖を始めた頃からだんだんとイカダが増えて、生育に時間がかかるようになったのかという、その生育に時間がかかるようになった経緯と、その 3 年から 1 年にという考えたい理由をお聞かせください。

清広さん

カキのここでの養殖の歴史は 60 年ぐらいはあると思うんですけども、60 年ぐらい前は、資材がなかったので良い天然のわらをコールタールにつけていかだを止めたり、そういうような道具しかなかったんですね。ですから必然的に施設が 1 年しかもたないんで 1 年で生産してた。だから 1 年での生産は以前やってたので不可能ではなかったんですね。それでだいたい 50 年ぐらい前になって急激に養殖が普及したんですけども、それにはやっぱり化学繊維の登場があったんですね。プラスチックロープ、それで耐久性がもう抜群に良くなって、10 年でも 20 年でも使えるようになる。そのお陰ででどんどんどんどん増えていきましたよね。化学繊維で耐久性が良くなったおかげで過密養殖になってしまったという歴史があるんですけども、やっぱりたん投入した施設はコストがかかってますので、1 台 100 万円前後かかりますので、その多額の費用を投じた施設を撤去するっていうことは、ほぼ不可能だったわけですね。それで生育期間が 2 年なり 3 年になってしまったということですね。

総合司会

発達技術の発達によって 3 年に増えていたということなんです。わかりましたありがとうございます。続いて質問いただいております東京湾再生ハゼ博士さんからなんですが、宮田さんにです。今回、東京の親子の皆さんがこういったことに参加ということありましたけれども、地元南三陸町の子もたちのとか、ご家族の参加

とかそういったこともあるんでしょうか？また相互の交流というのはあるんでしょうか？という質問をいただいております。

宮田さん

そういうこともやりたいね、っていうことは太齋さんとよく話はするんです。我々の努力不足の面もあるんですけども、夏休みのスケジュールを東京とこちらでなかなか擦り合わせるっていうのはそうですね……。頑張ればできますかね。どうなんですかね。

総合司会

せっかくですから地元の子どもたちもよりたくさん見ていただきたいという思いはありますよね。

ファシリテーター（太齋）

地元は地元で、ネイチャーセンターさんが頑張ってる場所もありますし我々も講座提供してるので。なんかその、交流したらどうかという話をよく伺うんですけど、それなぜそれが必要なかがちょっとなかなか、もちろんその場があればいいですけど、それにかかる手間とか、調整の労力考えたら、個々にいくつもの講座があってもいいんじゃないかな、って私なんか思っちゃいますけどね。

総合司会

なるほど。ここはまた今後討論の余地ありということですね。

宮田さん

一方で東京でこういう活動を広めてですね、いろんな学校がこの町にたくさん来てくれるように、ある意味 PR もこれからしていきたいなど。だいぶプログラムを確立してきたので、これから少し売り出し期間に入ろうかなということで、いろんな方に来ていただいて、そういう中で地元と上手にですね、一緒に活動ができる場面ができるといいかなというふうに思います。

総合司会

はい。ありがとうございます。質問の方は以上です。

ファシリテーター（太齋）

おいでいただければ、そこで自然と町民の皆さんとの交流が生まれるので、そこで例えばこういう先生方がいらっしゃる。そういう場を上手に利用していただくのがいいのかなというふうに思ったりしますけどね。

あとこの後の発行発表でいろんな高校生の取り組みなんかあって、これは外部の方とまた交流がありますが、それもご紹介できればなど。

総合司会

最後会場の方から何かご質問ありますかね最後、会場の方の皆様いかがでしょうか？

会場から

笹川と言いますけども、発表とって面白かったです。南三陸にはずっと行きたいと言ってたんですけども、今日初めて来て。それで今のカキの話は津波でたまたまみたいな要素もあるっていうことだけとそこを逆手にとってやっていけたり、皆さんいろいろ山のことやら里のことやら非常にアイデアを持つということと、それを実際にやるっていうことと、一定のどこまで成果が出ることをどこまでやりきっていくっていうこととか、いろいろネットワークを作っていくっていう、どこの自治体でもそういう努力はしていても、そんなに簡単にうまくいってはいないようなところも多いと思っているんですね。そういう中で、仕組みの問題も一方にはあると思うんですが、もう一方で、皆さんリーダーとして取り組まれている人たちのなんか資質というかですね、面白がるとか、ねばり強いとか、アンテナが高いとか、いっぱいあると思うんですが、そういうことについてお互いにどんなふうにあの人もお互い面白いよねとかって、人っていう面で何か特徴があるとしたら、それを教えてもらいたいなと思いました。よろしくお願いします。

ファシリテーター（太齋）

ちょっとなかなか難しいご質問かもしれません。

ただ、毎回我々で集まって話するのは、なんか変態が多いよねみたいなとこですね。何かに、ものすごく興味を持つとか、面白がるとか、やっぱりそこはすごく重要な資質かなと思うのと、あと、何て言うんすかね、すごく強力なリーダーがいるわけじゃないってのもポイントかなと思ってまして。皆さん本当に柔らかいリーダーシップといいますか、楽しんでやってる姿で皆さん引っ張りみたいな、ここがすごく大きいのかなと私的には感じたりしてます。本当は一人一人にお答えいただきたいんですけど、ちょっと時間が押してしまったので、こんなお答えで。あとは休憩中とか懇親会なんかで、ご質問いただければと思います。すいません私の方の段取りが悪くて時間が押してしまいましたけど、ありがとうございました。

総合司会

はい。ご質問ありがとうございましたそれでは、皆さんからのお話はちょっと割愛させていただくということで大変申し訳ございません。最後にまとめを。

ファシリテーター（太齋）

はい。今日、南三陸オールスターズの面々をご紹介できたことをとても嬉しく思っています。またこれ以外の方もたくさんいらっしゃるんでね、そこはまた是非南三陸においていただいて、会っていただければと思います。今日は皆さんありがとうございました。

総合司会

皆さんどうもありがとうございました。後藤さん、佐藤さん、阿部さん、野添さん、佐藤克哉さん、工藤さんです。宮田さんもどうもありがとうございました。今一度盛大な拍手をお送りください。ありがとうございました。それではセッション1、これで終了させていただきます